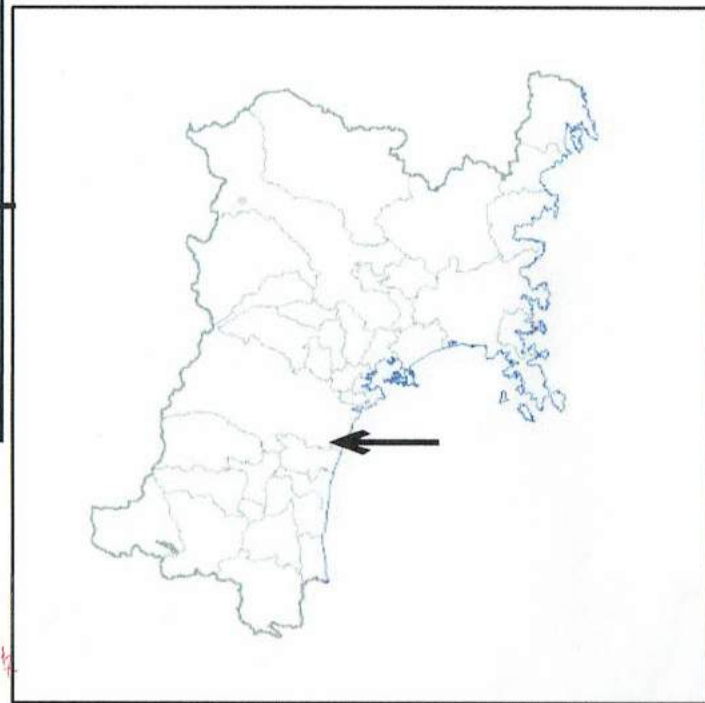
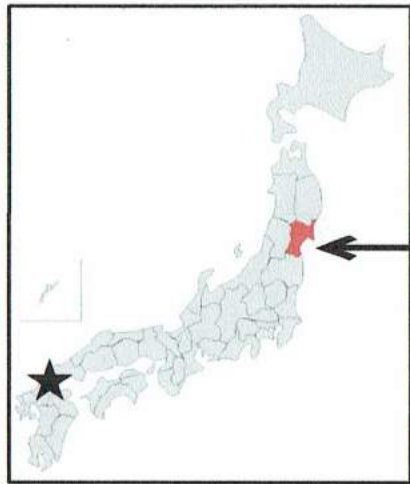


# 東日本大震災と障がい児・者の状況

宮城県歴教協 仙台支部 高橋 誠



分科会名称は「障がい」を使用するが新聞記事などはその表記に従って、「障害」とすることをお断りする。

## はじめに

この報告は2011年3月11日に起きた東日本大震災で、障がいのある人や子どもたちがどのような状況に置かれたかを、聞き取りと地元新聞（主に『河北新報』）の記事で構成して報告するものである。

主な聞き取りの対象としては、筆者が3月末まで医療に密接な環境にある学校に勤務していたことと4月から知的障害特別支援学校に勤務していることから、これらの子どもたちの状況となる。

また、筆者自身が、その設立から運営にかかわってきた仙台市南部に位置する福祉施設Sで働く障がい者たちの置かれた状況も聞き取りから報告する。

そのSは仙台市南部で沿岸から約5 km

の所にある。大津波は仙台東部道路の堤防効果のおかげで施設の手前2 km で止まった。利用者約20名は全員無事でスタッフにも大きな被害はなかったが津波を恐れて近くの小学校に避難して不安な夜を過ごした。ライフラインと通信手段が断たれ、家庭と連絡がとれなくなった利用者たちは一週間ほど帰宅できなくなった。その間の知的障害、自閉症、ダウン症などの利用者たちの不安はたいへんなものであったと施設長から聞いた。

詳しくは後述するが、災害弱者である高齢者や障がい児・者の状況を3か月程の新聞記事の時間経過（②～⑦は見開きで記事に対応）を追いながら、その困難な状況を浮き彫りにしていきたい。

## ① 震災直後、各学校では

(1) 『クレスコ』No.124 (2011.7月号)「東日本大震災 学校・教育は今」を特集

宮城高等学校・障害児学校教職員組合(宮城高教組)障害児学校部長で、3月まで筆者と同僚だった佐久間徹さんが書いているので以下に引用させていただく。

「震災の日は、当時勤務していた特別支援学校の卒業式でした。暖かな春の陽射しを受け、卒業式がおこなわれました。午後、みんなが職員室に戻っていたときに大きな揺れがやってきました。長い揺れが繰り返されました。ようやく揺れがおさまると、同時に停電となりました。大きな被害はなかったのですが、夜になり、学校のとなりの病院に残っている子どもたちはひとつの病棟に集められ、ロウソクを使い、非常食を食べていました。外は雪が積もってきて車の窓ガラスはすっかり凍っていました。津波の被害が大きかったところでは、本当に大変な夜を迎えていたことが、後からわかりました。

「この日、県北沿岸部のK支援学校は、通学バスが発出した後に地震がきたそうです。バスはすぐに学校に戻り、ほとんどの子どもたちは学校に泊まりました。ライフラインは途絶えてしまいましたが、給食の食材を使って食事をとりました。余震が続く、火災も起きている地域でした」。

「I支援学校でも、地震後に学校を頼って避難してきた子どもたちの家族を受け入れ、避難所として被災された方の支援にあたりました。学校の給食設備を使い、残っていた給食の食材で炊き出しをしていたそうです。水道が復旧するまでは、自衛隊などに給水してもらっていました」。

(2) 佐久間さんが知人とメールでやりとりした震災発生一週間後の各校の様子

「仙台市内の特別支援学校(3/17現在)児童生徒の無事が確認されました。電気OK、水道だめです。校舎の損傷は少しありますが、旧プレハブは天井が抜けました。立ち入り禁止。安否確認の結果、生徒はかなり不安定になっているようです。となりの施設からは、絶えず叫び声や暴れている音が聞こえています。食料は足りているとのこと」。

「県中央部の特別支援学校(3/17現在)2人の児童生徒の安否が確認できず、心配しています。一人は津波のあった地域の住所です」。

「県北部沿岸部の特別支援学校(3/18現在)生徒安否不明4名、死亡2名。保護者の不明や職員の家族の不明も。本校への避難80名ほど。職員が交代で泊まって対応。地域の方から、おにぎりなど食料の差し入れがあり、ありがたい。今日、学校、電気と水復旧」。

「県中央部の特別支援高等学園。I市の避難所になっています。多いときには80名ぐらいの避難の方がいたそうです。3月11日は帰省日で、1年生は家に帰る予定でしたが、保護者が迎えに来られない場合は宿泊することになりました。気仙沼・石巻の生徒は帰れず、まだ寮に泊まり続けています」。

「仙台市内の特別支援学級(3/17現在)海岸方面からぞくぞく避難してきて、大津波が来るからと揺れている校舎にのぼった。学校で一夜を明かし、情報が入るにつれて大変なことになっていることがわかり恐ろしくなりました。A地区の生徒が自衛隊に救出されました。安否確認できるまでの恐怖は経験したことがないです。毎日片づけと避難所の手伝いと(年度末)事務処理です」。

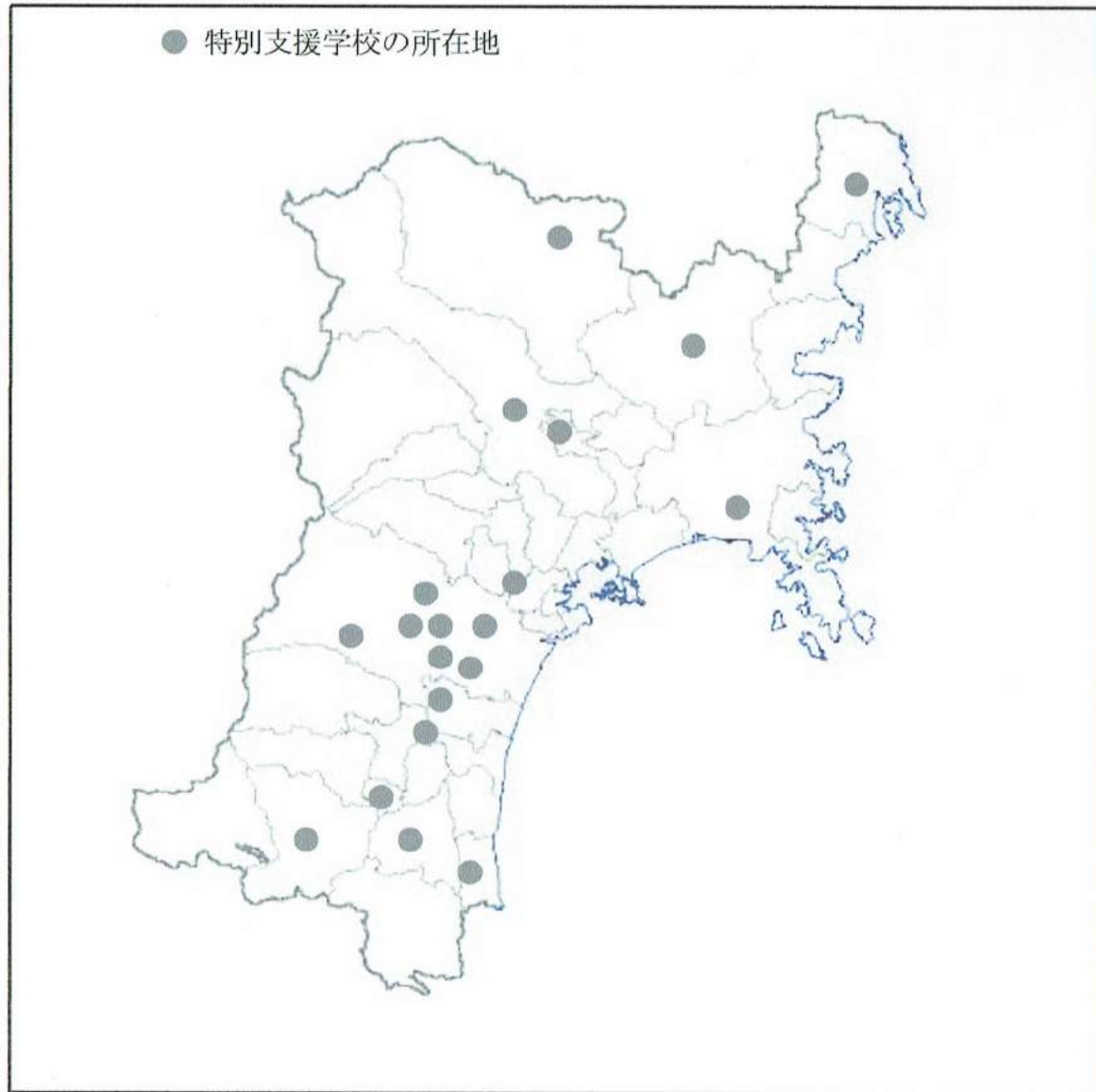
「県南部内陸部の特別支援学校。地震発生時は、小中学部の卒業式でした。午前中に

小中学部の児童生徒は下校し、学校には教職員だけがいました。ボイラーと給食関係は、通電後の確認が必要です。本校の児童生徒と保護者で死亡・行方不明はいませんでした」。

### (3) 佐久間さんの聞き取りのまとめ

「先生たちは安否確認のために家庭訪問をしました。津波の被害が大きかった沿岸部の先生は、がれきの中も歩きました。家族を亡くしたり、家をなくしたりしている子

にも会い、避難所での大変だったようすを聞いて歩いたそうです。避難所にいる子で、家族が買い出しに行くときにいっしょに連れて行かなければならず、いつもと違う生活が理解できずにいる子に会いました。家族を亡くして、まわりの人にがんばれと励まされ、寂しさをじっと耐えていた生徒にも会いました。街だったところを歩き、ここにはあの家があったはずなのに、生活が消えてしまった様子を目の当たりにして、心が疲れたと話してくれました」。



## 2 3/17 「在宅医療網渡り 停電とガソリン不足深刻」

### (1) ライフラインは正に生命線

医療センターはすぐに非常電源が稼働し、生命の危険にさらされる重度障がい児の入る病棟は最低限の電力が確保された。一週間はもつだけの緊急備蓄があるということであった。しかし、それはごく狭いエリアに限られ、一般病棟は数日間の停電状態にさらされることになる。

3月中旬は仙台はまだまだ寒く、震災当日から雪が降り続いていた。備蓄の灯油を大事に使いながら入院している子どもたちの暖をとらなくてはならない。病室でなく食堂に集めて、少ない暖房でしばらくまかなわなければならない。

電気・ガス・水道そしてガソリン・灯油の供給がストップすることは正に生命の危機にさらされるということを痛感した。

### (2) 在宅酸素療法の子どもたち

ところで、重度の病棟を退院して在宅で酸素療法をしている子どもたちはどうなったのだろうか心配になった。

ある子どもの家庭は、退院するときに、万が一の停電に備えてガソリン式の発電機を用意した。沿岸部ではないし、たいへん周到な保護者であるので、ガソリン不足の状況になったが、きっとガソリン携行缶を用意して備蓄していたのであろう。もし何か緊急事態となれば医療センターを頼って入院してくるはずである。

電話もなかなかつながらない状況のなかで、医療スタッフは退院した患者や長年にわたってフォローしている患者の状況をガソリンを有効に使いながら宮城県内を巡回して必要な薬、経管栄養剤、カニューレなどの医療材料を直接届ける体制をとっていた。

### (3) ヘリコプターで救助された子ども

沿岸部に住む要医療行為の子どもたちはどうなったのであろうか。なかなか情報が入ってこない中、ある子どもが津波にのみれることなく高台に避難したものの、自宅は全壊し、経管栄養剤もすべて流されてしまった。高台で一晩、寒さに震えながら救助を待ち、翌日、自衛隊のヘリコプターで吊り上げられて救急病院に搬送された。そして移動手段が確保されるのを待って医療センターに転院してきた。数か月前に退院したのだが、思わぬことで再入院となった。再会した子どもは私たち教員の聞き覚えのある声を聞いてにっこりと笑ってくれた。

### (4) 退院できなくなった子どもたち

沿岸部に自宅があり、津波被害で帰ることができなくなった子どもたちもいた。また、自宅はあるものの、ライフラインが復旧しないかぎり、在宅でケアすることが困難な子どもは保護者からの要請に応じて退院を延期し、引き続き入院生活を送ることになった。年度末・年度始の入退院の時期を迎える直前の大震災であったため、病棟は例年とは違った状況になっていた。

一方、大きな余震も続いていて被害の拡大も懸念されるため、どうしても連れて帰りたい保護者が、道路状況の悪い中、ようやく医療センターにたどり着いて、夜中に退院手続きをし、宿直体制をとっていた学校で転出手続きをしていった例もあった。仲の良かった友達にあいさつできずに地元へと帰っていった。



# いのちの地平 重度障害者

## 在宅医療綱渡り 停電とガソリン不足深刻

震災によるライフラインの断絶が、人工呼吸器などが必要な重度障害者の「いのち」を脅かしている。電気がガソリンは機器の作動に欠かせず、復旧の遅れに患者を救済する声は悲鳴を増す一方だ。

川島孝一院長は「停電で呼吸器や吸引器が止まる事態になれば救急搬送することになり、被災者の治療でベッドの足りない病院に影響が出る。在宅でしのげるようにする配慮が必要だ」と話す。

宮古市は、被災した宮古市の母親を支援し、横浜市からヒッチハイクで駆けつけた菊池芳志

を登録。患者側が準備した予備バッテリーでも不足する場合は、小型発電機や移動電源車を回すことにしているが、「数に限りがあり、個別に重要性を相談させていたが、なかなか話している。」

仙台東部で慢性意識障害(58)は人工呼吸器とたん電した。妻(55)は人工呼吸器を内臓バッテリーで6時間、自宅マンションの非常用電源で4時間駆動させた。ついに代替電源がなくなり、病院に緊急搬送。辛うじて呼吸をつなぐことができた。妻は「停電は仕方ないと思っっている。この先どうなるのか、不安は大い」と話す。

青葉区の仙台住診クリニックは、人工呼吸器やたん吸引器が必要な在宅の患者約120人の注目をしている。地震直後の避難で患者は自動車のシガーソケットや自前の小型発電機で電源を代替してきたが、どちらもガソリンが必要だ。このためクリニックは14日、職員総出で手持ちのガソリンを患者宅に配った。

東北電力の一部の支店・営業所は、人工呼吸器などが必要な重度障害者

↑ 3/17の記事は「いのちの地平」と題する遷延性意識障害や奇跡の生還を果したものの高次脳機能障害に悩む人取材するシリーズが年末から続いていたものである。取材の中で大震災が起き、停電とガソリン不足に絞って連載を続けた記事である。

### 3/26 「障害児と地域再生へ」

#### (1) 初めて障がい児の記事が登場

3/26の記事は、震災後、新たに取材した上で掲載された初めての障がい児・者にかかわるものである。

沿岸部の気仙沼市で、障がい児向けのデイサービスと18歳以上を対象とした就労体験事業を行っているNPO法人である。活動拠点は津波で流され、代表の自宅に利用者27人中、15人が集まったという記事である。

「利用者の中には、家が倒壊し、避難生活を送る子が少なくない。自閉傾向の強い子どもにとって、自宅と違う環境の避難所生活はストレスとなり、逃げだして戻ってこないこともある。」

#### (2) 自閉症の子どもたちと保護者の苦悩

3/21生活関連情報「伝言板」◇住民の声(仙台市青葉区桜ヶ丘・女性)

「自閉症などの発達障害児は配給の順番待ちでパニックになりやすい。行列を見ただけで興奮し「わーっ」と声を上げ列を乱してしまう。見た目では分からないので、「親のしつけが悪い」と言われ、つらい。障害者への理解や配慮をお願いしたい」との投稿があった。

3月22日のNHKニュースでは「自閉症の被災者ケアの手引き」と題して、震災で多くの方が避難生活を送っているなか、自分の意思を伝えることが難しい自閉症の人は避難所などで孤立するおそれがあるとして、日本自閉症協会では、被災した自閉症の人と、その家族などに向けて、避難所での注意や心のケアをまとめたハンドブックを公開しているという報道がされた。

実際、避難所となっている多くの学校や公民館・市民センターなどの駐車場では自閉症や軽度発達障害と思われる子どもとそ

の家族が、自動車の中で避難生活を送っていた。

4月、知的障害特別支援学校に異動した。まだ、学校は始まっていないが、前年度の担任たちが家庭訪問をして各家庭の被害状況を確認しているような中に赴任した。在籍する子どもたちの大半は自閉症スペクトラムに属する子どもたちである。聞くところによると自宅では生活できないと自動車での避難生活を送り、遠くの親戚の所に避難したということである。

子どもたちの中には慣れない避難生活のストレスで下痢の症状が続いている子、毎日のように続く震度3~5の余震におびえ続け、震度がいくつであったかに執着して話し続けて止まらないなどの動揺する子どもたちの様子を聞いた。

#### (3) 福祉施設Sで続く避難生活

ラジオでは各福祉施設の安否情報を流していた。Sも全員無事であることを知らせていた。その間、施設の作業内容である弁当のための豊富な食材をプロパンガスと奇跡的に出ていた水道水を利用して十分な食事をとることができた。

地震発生から約一週間を過ぎて、電気、通信が復旧し、家庭と連絡が取れるようになると家族が迎えに来たり、ガソリンがない家庭にはスタッフが送り届けたりしながら帰宅させた。大震災後の家族との再会は涙、涙であった。自動車で津波に追われながらも何とか助かった家族もいた。幸いなことにSの利用者の家族には誰一人として犠牲者がなかったのである。

3月11日の本震で築百年の旧施設が甚大な被害を受け、3月下旬には応急で筋交を入れる補強工事を施した。

# 「恩返し」誓い活動再開

ネットワークオレンジ代表理事 小野寺美厚さん(41)＝気仙沼市



息子を養育する小野寺美厚さん(右)と子どもたち(左)が笑顔で活動再開の様子。3月26日、気仙沼市の小野寺さん宅で撮影。

# 障害員と地域再生へ



3・11大震災

「元気になった」と、はがりの紙を、若い男性スタッフが、駆け寄り、抱きかかるとして、涙でハグを交わした。

障害者の自立支援に取り組む気仙沼市のNPO法人「ネットワークオレンジ」代表理事の小野寺美厚さん(41)は、震災後、障害のある子どもたちのケアに力を注いでいる。

震災後、市内30か所の施設が約230人を受け入れた。福祉避難所となった障害者生活支援センター「ハンズ宮城野」(宮城野区)では25日現在、認知症の高齢者や心身障害者11名が寝泊まりしている。

「学校など、地域の避難所は。手すりや障害者用トイレといった設備が不十分で、見知らぬ人に囲まれると情緒が不安定になる心配もある。障害者生活支援センターは、もともと通所施設だが、障害者用設備が整い、職員が24時間体制で見守る」。

実は、この福祉避難所には、筆者がかかわる福祉施設Sのある地域のボランティア団体に所属する子どもと保護者が避難していた。吸引器の電源を求めて避難所を渡り歩きながら区をまたいで仙台市北部の福祉避難所にたどりついたのである。

3月23日放送のNHK「福祉ネットワーク」で取り上げられ、インタビューにも答えていた。どこに避難したのだろうかとか案じていた筆者らは一安心であった。ところが、震度5の余震にすっかりおびえてしまい、保護者の生まれ故郷に移っていったのはそれから一週間後のことであった。

大崎市古川の例はこのようにある。「精神障害の自立支援に取り組むNPO法人「くもりのち晴れ」は震災後、障害者のケアに取り組んでいる。同法人は11日から3日間、スタッフ約10名で市内の避難所や住宅を訪ね回った。「怖い、怖い」と

## 4 3/31「要援護者届かぬ手」

### (1) 不足する福祉避難所・専門職員

記事のリードにはこう書いてある。「障害のある人や高齢者ら要援護者は、震災に伴う環境の変化がストレスとなり、心身ともに不安定な状況になりやすいとされる。東日本大震災の被災地でも、要援護者の支援が課題になっている」。

仙台市の例は次の通りである。「震災後、市内30か所の施設が約230人を受け入れた。福祉避難所となった障害者生活支援センター「ハンズ宮城野」(宮城野区)では25日現在、認知症の高齢者や心身障害者11名が寝泊まりしている」。

「学校など、地域の避難所は。手すりや障害者用トイレといった設備が不十分で、見知らぬ人に囲まれると情緒が不安定になる心配もある。障害者生活支援センターは、もともと通所施設だが、障害者用設備が整い、職員が24時間体制で見守る」。

実は、この福祉避難所には、筆者がかかわる福祉施設Sのある地域のボランティア団体に所属する子どもと保護者が避難していた。吸引器の電源を求めて避難所を渡り歩きながら区をまたいで仙台市北部の福祉避難所にたどりついたのである。

3月23日放送のNHK「福祉ネットワーク」で取り上げられ、インタビューにも答えていた。どこに避難したのだろうかとか案じていた筆者らは一安心であった。ところが、震度5の余震にすっかりおびえてしまい、保護者の生まれ故郷に移っていったのはそれから一週間後のことであった。

大崎市古川の例はこのようにある。「精神障害の自立支援に取り組むNPO法人「くもりのち晴れ」は震災後、障害者のケアに取り組んでいる。同法人は11日から3日間、スタッフ約10名で市内の避難所や住宅を訪ね回った。「怖い、怖い」と

繰り返す人、避難所で寝るスペースがなく、階段の隅で震える人、パニック寸前の当事者を見つけては、「大丈夫だよ」と語り掛け、共に寝泊まりをして励まし続けた」。

「同法人は大崎市と加味町で発達障害児の一時預かり事業を展開する。津波被害を受けた沿岸部からも「子どもを預かってほしい」という要請が来ているが、送迎車のガソリン不足で、すべての希望者を受け入れられない状態だ」。

繰り返す人、避難所で寝るスペースがなく、階段の隅で震える人、パニック寸前の当事者を見つけては、「大丈夫だよ」と語り掛け、共に寝泊まりをして励まし続けた」。

「同法人は大崎市と加味町で発達障害児の一時預かり事業を展開する。津波被害を受けた沿岸部からも「子どもを預かってほしい」という要請が来ているが、送迎車のガソリン不足で、すべての希望者を受け入れられない状態だ」。

### (2) 福祉避難所の役割を果たしたS

通信がとれるようになると分かってきたのが20名のうち、自宅が津波で流された利用者が5名もいたということである。うち1名は女性利用者で比較的軽度の知的障害なので家族とともに高台の公的避難所で生活することになった。

しかし、残る4名の男性利用者は、家族から一緒に避難所に入ることを拒否されてしまったのである。不安な生活環境ではイライラしたり迷惑をかけるだろうと容易に想像できたからであろう。施設長は、この4名を自宅で受け入れることにした。自宅2階で会社勤めの長男とともに生活し、さながらグループホームのような避難生活を送ることになった。

彼らの家族が少しずつ公的避難所から仮設住宅や民間アパートを借りて引っ越すようになると順次、家族の元に戻ることができた。5月末で2階の臨時「福祉避難所」はようやく閉鎖することができた。

施設長の長男は、学生時代にSでボランティアスタッフとしてアルバイト的に働いていたので彼らと気心が知れていたという好条件があったことに感謝しなければならない。

4

5 4/16 「再スタート 力貸して」

(1) 4月7日、震度6強の余震

名取市の福祉施設が余震の影響を受けて再開がままならないという記事が載った。ここは筆者のかかわるSのある地域での教え子が働く施設でもある。名取市の海岸から1 Kmの所にあったが、幸いにも全員避難して無事であった。

しかし、この施設では4人の利用者の家族が津波にのまれて死亡し、決して迎えが来ないという悲しい現実があった。重度の知的障害を持つ利用者はそのことが理解できずにいるという。

(4/25 「障害者声なきSOS」)

4月7日深夜の余震は震度6強を記録し、再び大きな被害が出た。Sも3月下旬に筋交を入れて補強したのだが、3月11日の本震で基礎も崩れていたのであろう。追い打ちをかけるような余震で築百年の古民家は傾き、危険建築物となってしまった。平屋での建て替えを計画し、現在、取り壊しを待っているが、国の復興基本政策の策定が遅れているためあらゆる施策が停滞して、どの機関がどの程度の負担をしてくれるのかがはっきりしないている。義援金や福祉基金の申し込みも進まず、6月になっても取り壊しに手をつけられないでいる状態である。

(2) 4/13 (インターネットで得た情報)

ここに出てくるコスモスクラブとは長年、福祉施設Sのある地域のボランティア団体と共に放課後ケア・長期休業中の余暇支援活動で仙台市に働き掛けて成果を上げてきた筆者にとって盟友である。また、Sも加盟している複数の施設で作るNPO法人の理事の一人である。新聞記事で見つけられなかったが、障がい児を取り巻く状況

の困難さが現れているので紹介する。

「障害児預かり生活支援 NPO、震災間もなくサービス再開」

生活再建サポートのため、積極的に障害児を受け入れたコスモスクラブ(仙台市宮城野区鶴ケ谷3丁目)

仙台市宮城野区のNPO法人コスモスクラブは東日本大震災後、被災した障害のある子どもたちを積極的に受け入れ、家庭の生活再建を後押しした。子どもを預けている間に家の片付けや買い物ができるため、保護者から好評を博した。

コスモスクラブは市鶴谷小の敷地内にあり、障害児を対象に放課後のケアや、長期休暇中の日中の預かりサービスを行ってきた。3月11日の地震で電気やガス、水道がストップし、当面は受け入れを中止する方針だったという。

佐藤智香子理事長(59)は15日、利用者の親子が鶴谷小の校庭に止めた車で寝泊まりしていることを知る。狭い車内での生活でストレスがたまることを心配した佐藤さんは施設を開放し、親子に2泊してもらった。

同時に「家の片付けや買い物ができず、困っている親子は多いはず」と考え、3月17日から4月8日まで、午前中から子どもたちを受け入れた。予想通り利用を希望する人は多く、10人前後がクラブに通ったという。

小学5年の長男(10)が利用する泉区のパート従業員女性(36)は「外出もままならなかったが、クラブの再開で家の片付けや買い物が安心してできた。とても助かった」と振り返った。

佐藤理事長は「地震で学校が休みとなり、子どものケアで困った保護者が多かった。少しでも役に立ててうれしい」と話している。

知的・精神障害者や高齢者  
要援護者  
届かぬ手  
届かぬ手  
届かぬ手

不足する福祉避難所・専門職員  
大崎

受け入れ縮小に困惑

心身不安定 ほかの避難者もストレス限界

陸前高田

仙台 2011年3月31日(木曜日) 15版 (16)



障害のある家族支える

嶋田 寿さん(58)＝仙台市



福祉避難所で、又原寿さん(左)、次男嶋田さん(右)を介する嶋田さん(2日、仙台市宮城野区)

3-11大震災

4/10 →  
3/31と同じ施設を  
紹介した記事  
「障害ある家族支える」

5

名取の障害者施設

再スタート力貸して

借りた事務所 余震で損傷

修理資材提供を



名取市の尚樹学院大生涯学習センターで毎月開催する通所者

東日本大震災で被災した名取市の知的障害者通所更生施設... 借りにした事務所が余震で損傷... 修理資材提供を...

犠牲 名取

通所の4人に迎え来ず

心身障害者の作業場を運営する名取市の社会福祉法人4人に迎え来なかった... 犠牲者4人の家族が津波の犠牲になった...



亡き母への手紙を書いた小林さん(左)、悲しみを和らげようと周囲の人々が励まし続ける14日、名取市

ふがいきんが... ありがとうございます... おはようございます... ねあつていただき... ありがとうございます

4/25より「障害者声なきSOS」より

6 4/25「障害者声なきSOS 宮城で家族の死者・不明者26人に」

(1) 支援センターまとめ 日本障害フォーラム(JDF、東京)の「被災障害者総合支援本部・みやぎ支援センター」(仙台市)によると、宮城県沿岸部と周辺の障害者支援事業所では、3月11日の地震や津波発生時に避難誘導が迅速に行われた結果、障害者が犠牲になった例はなかった... (2) 津波の犠牲になった子ども

無事だった。その後の第二波でとうとう流されて犠牲となってしまったそうである。あの日、学校にいた多くの子どもたちは避難して救われたが、卒業式後に帰宅していた子どもや体調が悪くて欠席していた子どもたちが犠牲となっている... (3) 福祉施設は壊滅的被害 多賀城市の福祉施設の被害状況の記事である... (4) 支援学校よりどころに この記事に出てくる子どもも筆者とかかわりがあり、大震災の半年前まで入院していた直接指導もした...

# 障害者声なきSOS



被災者の中には、重度障害者や高齢者が多く、避難先で生活が困難な状況にある。被災者の中には、重度障害者や高齢者が多く、避難先で生活が困難な状況にある。

## 迅速復興へ規制緩和を

**福祉施設は壊滅的被害**  
塩釜など

宮城で家族の死者・不明26人に

## 支援学校よりどころに

## 2次避難へ ストレス懸念



石巻支援学校に母親宮崎さんと身を寄せた可憐な子どもたち。避難生活に慣れ、徐々に笑顔を取り戻して来た19日

被災者の中には、重度障害者や高齢者が多く、避難先で生活が困難な状況にある。

宮城で家族の死者・不明26人に

支援センターまとめ

## 7 4/26 「石巻の重度障害児家族 生活再建に悩み」

(1) 医療的ケア不可欠 地元に施設なく  
リードには次のように書いてある。

「重い意識障害のある子どもを持つ石巻市の一家が、東松島市の祖母宅で避難生活を送っている。海沿いの住宅街にある自宅は、津波で1階部分がほぼ全壊。たんの吸引など医療的ケアが必要で子どもから離れられず、自宅の片付けは進んでいない。家族は「いつごろ元の暮らしに戻れるのか分からない」と、生活再建のめどが立たない状況に焦りを募らせる」。

## (2) 仮設住宅 望み

この子は特別支援学校中学部1年生である。1歳のときに脳に重い障害を負い、頻繁なたんの吸引が必要で、家族が片時もそばから離れられないのである。記事には次のようにある。

「自宅は石巻工業港から約500mの場所にあり、津波で1階天井まで水没した。片付けは父親が休日を使用して長女と床の泥を取り除いた程度。流された隣の家の納屋がもたれ掛かり、がれきが周囲に散乱したままだ。ボランティアの支援も考えたが、家族の立ち会いが必要なため利用できずにいる」。

「石巻市にはもともと、医療的ケアの必要な重症心身障害児が利用できるショートステイ施設がない。かかりつけの医療センターからショートステイ受け入れを提案されたが、母親は「初めての利用が離れた場所になるのは不安」と悩む」。

「非常用の足踏み式吸引器を準備していたため、震災後の停電を乗り切ることができ、たんの吸引用チューブやおむつなどは、障害児の保護者仲間と分け合った。医療センターや障害者支援ボランティアからの支援

物資にも助けられている」。

「自宅からできるだけ近い場所で生活しようと、仮設住宅への入居を申請した。市は障害者や高齢者を優先すると説明したが、第1次分137戸に対して応募は6731世帯にも及ぶ」。

## (3) 優先枠 回ってこない

6/24に続報が掲載された。仮設住宅の抽選から漏れ続け、これまで8回の抽選は全て外れた。

「保護者は「全壊した自宅は5年前、バリアフリーに新築した。せめて、スロープ付きの仮設住宅に住みたいけど…」とため息交じりに話す。建設予定戸数のうち優先枠に配分されるのは7割。6月5日現在の応募件数のうちの優先枠希望は全体の59%であるので計算上は有利になっているはずだが、完成戸数が4割弱にとどまり、希望に対応しきれていないのである」。

「保護者は入居申請書に「全介助が必要」「気管切開あり」「車いすを利用」など、障害の重さがわかるように備考欄いっぱい書き込んだ。石巻市は「申請件数が多すぎるため、(備考欄に)記入したからといって必ずしも抽選で考慮はしない」と素っ気ない。慣れない避難生活のためか、震災前から体重が約1割減って22キロになった」。

「宮城県内の仮設住宅は必要戸数の6割が完成した。施設整備は進むものの、優先されるべき人たちがいつまでも入居できなかったり、逆に入居したために生活に困る結果となったり。生活再建の一步がなかなか踏み出せない現実、被災者の戸惑いが広がる」。

# 石巻の重度障害児家族 生活再建に悩み

## 祖母宅に「仮設住宅望み」

避難生活を送る重度障害児の家族は、被災後の生活再建に悩んでいる。被災者支援センターの支援員は、被災者から「仮設住宅」を望む声が多く聞かれる。被災者支援センターは、被災者から「仮設住宅」を望む声が多く聞かれる。被災者支援センターは、被災者から「仮設住宅」を望む声が多く聞かれる。



被災者支援センターは、被災者から「仮設住宅」を望む声が多く聞かれる。被災者支援センターは、被災者から「仮設住宅」を望む声が多く聞かれる。被災者支援センターは、被災者から「仮設住宅」を望む声が多く聞かれる。

# 湯ったり癒やしを



盲導犬と一緒にホテルに入る視覚障害者。仙台市太白区のホテル佐助

## 被災の視覚障害者仙台・秋保に招待

日本盲導犬協会は、被災した視覚障害者を仙台市太白区の秋保温泉に招待する。日本盲導犬協会は、被災した視覚障害者を仙台市太白区の秋保温泉に招待する。日本盲導犬協会は、被災した視覚障害者を仙台市太白区の秋保温泉に招待する。

## 石巻などの16人参加

石巻などの16人が参加した。石巻などの16人が参加した。石巻などの16人が参加した。石巻などの16人が参加した。石巻などの16人が参加した。

(1) 16版 第41215号



仮設住宅で自立している。仙台市太白区

## 「優先枠回ってこない」

被災者支援センターは、被災者から「優先枠」を望む声が多く聞かれる。被災者支援センターは、被災者から「優先枠」を望む声が多く聞かれる。被災者支援センターは、被災者から「優先枠」を望む声が多く聞かれる。

### 焦点

3.11大震災

↑ 6/6 視覚障害者の記事

# 光なき不安

視覚障害者

## 津波は音もなく来た



被災した視覚障害者は、津波が来た瞬間に音もなく来た。被災した視覚障害者は、津波が来た瞬間に音もなく来た。被災した視覚障害者は、津波が来た瞬間に音もなく来た。

## 障害者たちの3.11



被災者の自宅があった場所に瓦礫が積み上げられた。3月11日

被災した視覚障害者は、津波が来た瞬間に音もなく来た。被災した視覚障害者は、津波が来た瞬間に音もなく来た。被災した視覚障害者は、津波が来た瞬間に音もなく来た。

# 音なき恐怖

聴覚障害者

## 避難呼び掛け 気が付かず

被災した聴覚障害者は、避難呼び掛けの音に気が付かず。被災した聴覚障害者は、避難呼び掛けの音に気が付かず。被災した聴覚障害者は、避難呼び掛けの音に気が付かず。

## 被災障害者を支援するみやぎの会

阿部一彦代表

## 適切な情報支援 不可欠

安否確認に法の壁

## 行政、地域など共有必要

「視覚障害者 光なき不安  
津波は音もなく来た」  
「聴覚障害者 音なき恐怖  
避難呼び掛け 気が付かず」

「適切な情報支援 不可欠  
安否確認に法の壁  
行政、地域など共有必要」

5/29 →

「不安抱えるてんかん患者  
被災後に発作頻発も」

# 不安抱えるてんかん患者

てんかん患者

## 被災後に発作頻発も

被災したてんかん患者は、被災後に発作頻発も。被災したてんかん患者は、被災後に発作頻発も。被災したてんかん患者は、被災後に発作頻発も。

関係者「電話相談利用して」



「石巻祥心会が着工単身、世帯用計54室」

社会福祉法人石巻祥心会(宍戸義光理事長)は、石巻市須江小国地区に障害者やその家族が暮らせるケア付き仮設住宅「小国の郷(さと)」の建設に乗り出した。東日本大震災で生活の場を失った障害者や家族に住まいと各種サービスを提供する。今後の生活基盤の安定などに役立ててもらうのが狙い。現在、入居者を募集している。

敷地は約6600平方メートル。祥心会が所有していた土地を活用するほか、震災で亡くなった故山内瀧子理事が隣に所有していた土地を遺族が提供した。

仮設住宅は単身用の14個室(約4畳半)と、バス、トイレ、キッチンが付いた世帯用の40室(約9畳)の2種類。単身用には共同で使用できる食堂やバス、トイレなども完備する。5人のスタッフも常駐し、各種生活相談や緊急時の対応、家事援助などに当たる。通院や買い物などの送迎サービスも検討中という。

事業費の約1億7000万円は日本財団

ROADプロジェクトによる支援を活用。

今月11日から着工しており、完成は6月20日。翌21日から入居ができる。入居期間は最長2年間。家賃は無料。ただし電気、上下水道、プロパンガスなどの使用料は入居者負担となる。入居対象は被災時に石巻市、東松島市、女川町に住居があり、障害者のいる世帯が条件。

宍戸理事長は「家屋が被災しただけでなく、介護者となる両親が亡くなるケースもあり、障害者を取り巻く環境は厳しさを増している」と説明。障害者を抱える家族は、避難所生活でも一般の被災者に迷惑をかけまいとして精神的疲労やストレスが大きいという。こうした背景から、障害者や家族が安心して暮らせるケア付き仮設住宅を建設することにした。

祥心会は「石巻地方の障害者福祉の復興とまちの再生を目指したい。生活の拠点をみつけることで家族は就労への確保につながる。障害者にとっても各種サービスを受けることで、グループホームでの生活を目指すための場にもなる」と話している。

助け合う力 大震災とボランティア

助け合う力 大震災とボランティア

被災者障がい者センターみやぎ代表 及川 智さん(32)

### 孤立防止へ継続支援

被災者障がい者センターみやぎ代表 及川 智さん(32)は、被災者や障がい者の孤立防止に向け、継続的な支援を行っている。震災後、被災者や障がい者の生活は大きく変化した。被災者や障がい者の生活は、被災前とは大きく異なっている。被災者や障がい者の生活は、被災前とは大きく異なっている。被災者や障がい者の生活は、被災前とは大きく異なっている。

### 在宅障害者を手助け

在宅障害者を手助けする活動は、被災後、被災者や障がい者の生活は大きく変化した。被災者や障がい者の生活は、被災前とは大きく異なっている。被災者や障がい者の生活は、被災前とは大きく異なっている。



及川さんは、活動の中で見えてきた障害者支援の課題は、「人によって障害の種類、程度が異なるため、さまざまなニーズに対応しなければならない。小規模作業所などでは施設の復旧作業もあり、多額の資金確保が課題だ。仙台市などの都市部は普段から地域のつながりが薄い。常に地域や周囲の人々との関係性を高め、見守っていく体制が大事だ」と述べている。

小野さんは、沿岸部の障害者施設157か所のうち93か所が被災して、予想

通り、作業所に集まったり、自宅にとどまったりしていた障害者が多くいたこと。当初、支援物資は避難所には届いていなかったことなどを把握して活動を始めた。現在のニーズの変化について、「当初は燃料と足を確保し、食料を障害者の元へ届けることに専念した。今は通院など移送のニーズが増えている。震災から3か月近くが経過し、障害者はもちろん、支える家族の負担が増している」と述べている。

→『河北新報』での続報

幸災 平成23年(2011年)6月25日(土曜日) 社会 16版 (22)

### 石巻 被災障害者の自立支援

#### 仮設福祉ハウス開所

東日本大震災で被災した障害者とその家族が暮らせる仮設福祉ハウス「日本財団ホーム 小国の郷(さと)」が24日、石巻市に開所した。スタッフが24時間常駐し、通常の仮設住宅での生活が困難な人々の自立に向けた支援を行う。

同市の社会福祉法人「石巻祥心会」の依頼を受け、日本財団が全国から寄せられた支援金で建設した。3月11日の津波で壊れた祥心会理事の遺族から提供された約6600平方メートルの土地を活用した。

障害者とその家族3、4人が暮らせる世帯向

「仮設福祉ハウス」を見て回る入所者たち—石巻市須江

## 仙台・荒浜で被災 ダウン症の安達さん



利用者と談笑しながら菓の選別作業をする安達さん(右)＝仙台市太白区の仙台ワークキャンパス

◇ 仙台市若林区荒浜の安達さん(25)は、東日本大震災の津波で、自宅と利用する授産施設(まどか荒浜)を同時に失った。施設へ復帰するまでに1カ月かかったが、今は仲間と働く喜びを感じている。

◇ 現在の仕事は、菓を加工した「福幸だるま」作り。顔の角質取りの美容品にしていたものを震災後に転用した。復興祈願のマスコットだ。安達さんは菓の数を数えながら、「いい菓が多い。菓の(選別)の仕事が楽しい」と笑顔で作業する。

# 仲間と働く喜び再び

## 全壊の授産施設 間借りで再開 「仕事楽しい」笑顔

6月初めには、家族で若林区荒井の仮設住宅に移った。施設に通う時間が半分になり、安達さんの負担も減った。最近では知り合いに自分から声を掛けたり、1人で買い物に行ったりと、落ち着きを取り戻している。

母の幸子さん(51)は「施設に戻って表情が豊かになった。一日の出来事をうれしそうに話している」とほっとする。

安達さんが仲間36人と働くまどか荒浜は間借り状態が続くが、来年4月には新たな場所での再建を目指しているという。

「まどか荒浜」は海岸から1 km もない沿岸地域にある福祉施設である。筆者も職場の進路研修で見学に訪れたことがある。

紙漉きをメインとしたクラフト部門と街道沿いに店舗をもってランチ・弁当を提供する飲食部門に分かれて作業している施設で

ある。筆者の自宅に年末に購入した手作りの2011年カレンダーが飾ってある。

また、筆者もかかわる障がい児・者のスポーツクラブ活動と一緒に活動していた人も複数働いていて、新聞記事で紹介された方もメンバーであるので印象深い施設である。

利用者は避難して全員無事だったが、避難先を書いた紙を掲示しに戻った職員が津波の犠牲になった。残念でならない。

### おわりに

震災から4か月あまりがすぎた。私事でいえば、妻の実家(気仙沼市)が津波で全壊流出してしまった。幸い家族に犠牲はなかったが、同じ気仙沼市内で津波の犠牲となった親戚もいる。義母は避難先から戻りたい気持ちと津波への恐怖心とで心が揺れ動いて精神的にも不安定になっている。経済的に精神的にも支援が必要なのが被災地の現状である。

また、気仙沼の美しい海を間近に見ながら生まれ育った妻にとって、焼け焦げたタンカーの残骸、流失した家屋や自動車などの瓦礫の山で、入り江がすっかりふさがれてしまった光景に声を失うばかりであった。実家とふるさとの風景を失ってしまった喪失感は大い。復興、復興と声高に叫ばれてはいるが、政府の対応が遅く、多くのことが手つかずのままである。

さて、障がい児・者の状況も新聞記事などで紹介されるようになって、少しずつ分かるようになってきた。今回、この報告が極めて断片的であり、障がい種別毎に整理することや校種による区別もつけないまま時間経過を追って羅列しただけのものとなってしまったことをお詫びする。いまだ東日本大震災の被害の全容が明らかになっていない上に、障がい児・者の被害状況もつかめないでいるのが現実なのである。これ

から各障がい団体やボランティア団体などが活動を再開し、障がい児・者への震災の影響がどのようなものであったか分かってくると思われる。

東日本大震災は、内陸部は徐々に復旧し、少しずつ元の生活に戻りつつある。しかし、家族や仲間、教え子たちを失った人々の悲しみは深く、沿岸部地域の復旧は遠い道のりであるのが現状である。震災の心の傷跡が癒えるまではかなり長い時間を要するものとする。

地域に根ざした歴史教育・社会科教育を研究・実践する私たち宮城歴教協は、この大震災の被害の実態を細部に至るまで収集し、記録し、分析することで、問題点と課題を明らかにしながら後世に伝えていく責務がある。困難な状況下ではあるが、県内それぞれの地域での被害の実態、子どもたちのおかれた状況、教育をめぐる諸問題について記録を集積していかなければならない。すでに宮城歴教協の会員はそれぞれの立場で、その仕事に取り掛かり始めている。

私は、これまでの障がい児・者とのかわりで、震災と障がい児・者を取り巻く状況を調査し、記録していくことが私に与えられた使命であると考えている。これから先、何年かかるか予想もつかないが記録し続け、歴教協大会や障がい児・者とかかわる研究会などで機会を得ては報告していきたいと思う。